

「こうして彼はジェイ・ギャツビー なる人物を創造した」

——『グレート・ギャツビー』再読——

小 野 良 子

序

1章 ニックの〈語り〉

1. 〈語り〉の構成
2. 〈語り〉の信頼性

2章 回想されたギャツビー

1. ニックの観察
2. ニックの想像あるいは創造
3. ギャツビーの告白

結 論

参考文献

SYNOPSIS

序

スコット・フィッツジェラルドは1922年7月、ロング・アイランドのグレート・ネックに転居する以前、次作の小説の構想で、「新しいもの—ありきたりではなく、美しくて、すっきりとした、しかも凝ったパターンの

キーワード：一人称の語り，全能の作者，全能の語り手，記憶，想像力

ものを書きたい」(ターンブル, p. 162)と語った。『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925年)はこのような「理想主義」(ターンブル, p. 162)から生まれた小説だった。『スクリブナーズ』(*Scribners*)の編集者マックスウェル・パーキンズに宛てた手紙の中でフィッツジェラルドは、「今度の新しい小説では全く創造的な仕事に真向から打ち込んでいるのです。短編の場合のようなちやちな想像力なんかではなく、正真正銘、しかも光り輝く世界のような想像力を維持しながら。(中略)この小説は完成すれば芸術性を意識した作品になるでしょう」(ターンブル, p. 163)と書いた。

1925年4月10日に『グレート・ギャツビー』は出版され、作家フィッツジェラルドは「若き奇才から一人前の芸術家」に変身した、と評された。「芸術性を意識した作品」、「実体感のある感覚的なイメージラリー」の背後には、ジョン・キーツが存在し、「沈思タイプの語り手という設定の背後」には、ジョゼフ・コンラッドが控えていた(ターンブル, p. 166)。

『グレート・ギャツビー』は、イエール大学出身で第一次大戦に従軍し、戦後、ニューヨークの証券会社で働き始めたニック・キャラウェイが、ギャツビーとの出会いと彼にまつわる出来事を回想するという手法で語られる。登場人物の一人が語るという手法は、たとえその語り手が〈全能の作者〉であるかのごとくに人物像や出来事を語っていたとしても、〈語られたもの〉はすべて、その語り手の視点、主観で捉えられ、解釈を加えられ、推測され、その結果、結論付けられた出来事、人物評であり、決して、〈全能の作者〉が語るような〈事実〉ではない。ニックの主観的判断だけで、ギャツビーに関わる出来事が推測され、判断され、提示される。ニックの記憶の再生なので各人物の心境、本音、言葉の真偽や発言の理由などは、

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

すべてニック本人の主観的記述になる。読者はニックのコメントと視点を通してのみギャツビーの出来事を知り、ギャツビーの〈告白〉に関しても、ニックが聞いた〈ギャツビーの告白〉をニックの解釈つきで聞くことになる。武藤氏は、「彼 [ニック] を通してのみギャツビーは存在する」(武藤, p. 8) と分析する。ニックはギャツビーをめぐるすべてのことに〈想像〉と〈解釈〉を行なうが、しかし、ニックの語り口調は、「一般的妥当性を充てることを目指して」おり、「個人的な関心」(武藤, p. 9) をとおして真実を語ろうとしている、と武藤氏は評価する。

しかしながら、はたして、ニックはギャツビーの〈真実〉を語ったのだろうか。そもそも、作者フィッツジェラルドは登場人物の一人の〈一人称の語り〉を利用することで、読者にどのように〈物語〉を読ませたかったのか。フィッツジェラルドが心酔していたコンラッドの〈一人称の語り〉に影響を受けたにせよ、『グレート・ギャツビー』で〈一人称の語り〉を用いる効果は何を意図したのだろうか。『グレート・ギャツビー』の問題点は、語り手ニックのギャツビーに関する情報の真偽が明白でない点だ。ギャツビーに関する風評と同様に、ギャツビー自身が語った自身の家系や職業の〈真相〉もいかがわしい。ニックもこれらに関しては全く信用していない。「ヨーロッパのあちこちの大きな都市で若きインドの王侯顔負けの生活を送った」(『ギャツビー』, p. 123), と明かすギャツビーの告白には、「あほらしくて、思わず吹き出しそうになるのを、必死に抑えなくてはならなかった」(『ギャツビー』, p. 123) ほどで、「彼の身の上話はいかにも陳腐で、裏が透けて見えた」(『ギャツビー』, p. 124), とニックは語り、ギャツビーの身の上話をすべて嘘だと見抜いたつもりでいる。ところが、ニックとギャツビーとの親交が深まると、ニックはギャツビーが語る過去のすべてを、〈真実〉として受け入れる。ギャツビーの生い立ち、両親のこと、ダン・コーディとの出会い——ギャツビーから聞いた過去の出来事

を、ニックは客観的に証明されなくても、〈真相〉として語る。ニックはなぜ、ギャツビーの話を実際として信用できるようになったのだろうか。

ニックの〈語り〉は「思い出して、記録する」という形式をとっているが、ニックに語らせることの効果は何か。ニックの記憶に基づいて過去の出来事の場面を再現している、という前提で語られているが、しかし、ニックはところどころ、「明確には覚えていない」と告白している。ギャツビーとデイジーのロマンスは、ギャツビーの言葉を忠実に紹介する記述ではなく、ニックの想像力とレトリックで書き直されており、読者は〈ギャツビーの語った真相〉の再現を聞かされるわけではない。一方で、トム・ブキャナンに関わる出来事——例えば、トムがギャツビー邸に友人と共に立ち寄ったこと、ギャツビーを昼食に招待したこと、プラザホテルでの騒動——などは、彼らの会話は〈引用〉の形式で、引用符に入れられ、忠実に再現されて、ニックの〈語り〉の枠組みが消え、〈全能の作者の語り〉にすり替えられる。二十世紀半ば以降の文学作品では、〈記憶〉は〈不確実なもの〉としてとらえられ、当事者の心的状況によって〈思い出の記憶〉は書き換えられる場合がある、と認識する。しかし、フィッツジェラルドは〈ニックの記憶〉を作者の記述のような正確さ、確実さでニックに語らせる。ギャツビーは嘘をいくつもついているし、ニックも知り合った当初はギャツビーの語ることを信用していなかった。にもかかわらず、ニックが突然、ギャツビーの言葉を信頼するようになるのはなぜか。作者が物語る場合は、登場人物の語る〈嘘と真実〉を読者は判断できる。しかし、登場人物が語り手になる場合は、はたして、〈嘘と真実〉は判別できるだろうか。

ケント・カートライトはニックを「信頼できない語り手」(“unreliable narrator”, pp. 218-32) と評した。本論考では、ギャツビーを回想するニッ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

クの〈語り〉の特質について検討し、作品の再評価を試みる。

1章 ニックの〈語り〉

1. 〈語り〉の構成

『グレート・ギャツビー』は語り手ニックの自己分析から始まる。若いころに父親が与えてくれた忠告のおかげで、「何事によらずものごとをすぐに決めつけないという傾向を身に」（『ギャツビー』, p. 9）つけたニックは、その性格が原因で、「一風変わった性格の人を数多く招き寄せることになったし [中略] 退屈極まりない人々の格好の餌食」にもなり、「取り乱した（そしてろくに面識のない）人々から、切実な内緒話を再三にわたって打ち明け」（『ギャツビー』 pp. 9-10）られた。ニックは「昨年の秋に東部からここに戻ってきたとき」、「人間の心根を高めから偉そうにのぞき込むような、派手ばでしい浮かれ騒ぎにすっかり食傷していた」（『ギャツビー』, p. 11）と振り返り、「本書の題名に名前を使わせてもらったギャツビーという人物一人だけが、そのような僕の思いから外れたところ」に位置している」（『ギャツビー』, p. 11）[下線筆者]と語り始める。原文では、“Only Gatsby, the man who gives his name to this book, was exempt from my reaction”（*Gatsby*, p. 8）と記述されているが、ニックが語り始める「本書」（“this book”）は、はたして、〈ギャツビーの思い出〉を回想してニックが書く〈ギャツビー回想記〉なのだろうか。このあとニックは、ギャツビーのパーティに招待され、ギャツビーと初めて顔を合わせた日までのことを語ると、「ここまで書いたものを読み返してみて、それぞれ数週間の感覚を置いてめぐってきたこれら三度の夜のことで、あたかも僕の頭がいっぱいになっていたかのような印象を与えかねないことがわかる」（『ギャツビー』, p. 107）[下線筆者]と語って、〈ギャツビー回想記〉をニックが今、書いている過程であることを読者に確認する。原文で

は、“Reading over what I have written so far, I see I have given the impression that the events of three nights several weeks apart were all that absorbed me.” (*Gatsby*, p. 56) と書かれており、ニックが過去に体験した出来事について書いている現在の姿が想起できる。

また、ニックは「この本」が個人的回想記にとどまらず一勿論、日記でもなく一〈読者〉を念頭に置いて書かれていることを明らかにしている。ギャツビー邸のパーティに参加した人々について言及した時、ニックはこのように記している。

僕は時刻表の余白の部分に、その夏にギャツビーの屋敷を訪れた人々の名前を列記したことがある。[中略] ギャツビーの屋敷を訪れてその歓待にあずかりながら、彼について何ひとつ知らずにおくという奥ゆかしい敬意を表したのがどのような人々であったか、僕が通り一遍の概説を加えるより、そこに記された名前を丸ごと列記したほうが、その様子をより鮮やかに思い浮かべていただけるものではないかと思う。 (『ギャツビー』, pp. 115-116) [下線筆者]

ニックが名前を列記するのは、「その様子をより鮮やかに思い浮かべて」くれる読み手を想定しているからで、その対象者は「この本」の読者である。原文では上記引用の下線部はこのように書かれている——“I can still read the grey names, and they will give you a better impression than my generalities of those who accepted Gatsby’s hospitality” (*Gatsby*, p. 60) [下線筆者] ——。ニックは明らかに〈読者〉を想定して〈ギャツビー回想記〉を書いている。しかもその読者は、名前の列記だけで、「ギャツビー邸を訪れた人々」の「様子をより鮮やかに思い浮かべ」ることができる読者、つまり、ギャツビー邸を訪れた名士、有名人たちを認識できる読者、〈ギャ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ツビー回想記)を〈虚構の物語〉ではなく、〈ドキュメンタリー〉——読者の生きている同時代の記録——として読むことができる、ニックと同時代を生きていて、ギャツビーのことを知っている人々になる。

ニックが「この本」を〈回想記〉として書いているのであれば——と、作者フィッツジェラルドが想定しているならば——何故、ニックは出来事を細部に至るまで正確に再現しながら、ある場合には記憶が飛んでいたり、ニック個人の憶測だけでギャツビーの過去を記述し、ギャツビーの語らなかつた言葉をニックが豊かな想像力によって生み出す華麗な文体で〈ギャツビーの真相〉であるかのように語るのだろうか。また、ニックはトムたちとプラザホテルに行き、部屋に案内されるが、その「細かい経緯は今となっては皆目思い出せない」(『ギャツビー』, p. 229)と語りながら、プラザホテルに行く直前に、トムの屋敷の昼食会で交わされた会話の一部始終、ホテルの部屋での会話の詳細は、ニックは〈全能の作者〉のごとくに詳細を再現する。ニックが〈信頼できない語り手〉と〈全能の作者〉の二つの顔を使いわけるとの効果、意図は何なのだろう。

2. 〈語り〉の信頼性

ニックは「親密な好奇心」(『ギャツビー』, p. 110)を抱くようになったジョーダン・ベイカーがくしらっと嘘をつく不誠実な女(『ギャツビー』, p. 110, p. 111)であることを語った時、ニック自身の人格についてはこのように自己分析している——「人は誰も自分のことを、何かひとつくらいは美德を備えた存在であると考えものだ。そして僕の場合はこうだ——世間には正直な人間はほとんど見当たらないが、僕はその数少ないうちの一人だ」(『ギャツビー』, p. 113)。ニックは自身を「正直な人間」——“I am one of the few honest people that I have ever known”, *Gatsby*, p.

59- [下線筆者] ——と評価しているが、しかし、ニックは〈正直さ〉としてどのような特性を示しているのだろうか。ニックはジョーダンの「不誠実さ」を話題にしたが、彼はこの時、ジョーダンとの「関係を一步前進」させながら、実は、故郷には婚約を噂された女性がいる。ニックは「婚約した」と噂になったのでこの女性を残してニューヨークに出てきたが、彼女には週一回、手紙を書いており、その手紙の末尾には「ラブ、ニック」(“Love, Nick”, *Gatsby*, p. 59) と記していた。故郷に残してきた女性に毎週手紙を送り、しかも、ジャージーシテイに住む経理部の女性と関係を持ち、その兄に無言の圧力をかけられるとさりげなく関係を解消する (“I let it blow quietly away”, *Gatsby*, p. 57)。そして、このあとニックはジョーダンと親密になっていく。

ジョーダン・ベイカーは借りた車の屋根を開けたまま雨の中に放置しながら、自己の責任を認めない。最初の大きなゴルフ・トーナメントで、悪いライのボールを動かす不正を行なったと糾弾されたが、結局、目撃者の見間違いに転嫁された。ジョーダンの「不正直さ」は、ニックが複数の女性に対して不誠実な態度をとったこととは、問われるモラルが異なるだろうが、ニックは自身が評価するほど「正直な人間」とは言えないだろう。さらに、ニックは〈妄想する語り手〉でもある。

五番街を歩きながら、人混みの中から夢をかきたてる女性を選び出し、さあ、これから僕は彼女の生活に入り込んでいこうとしているんだと、しばし想像するのが好きだった。[中略] ときどき、あくまで想像のうちでだが、僕は人目に付かない通りの角にある彼女たちの住居まであとをつけていった。そして彼女たちは、戸口を抜けてほんのりとした暗闇の中に消えていく前に、こちらを振り向き、意味ありげなほほ笑みを僕に送るのだ。 (『ギャツビー』, pp. 108-109) [下線筆者]

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

「夢をかきたてる女性」(“romantic women”, *Gatsby*, p. 57) に目を留め、想像力で彼女の部屋に入り込む、と語るニックは、ニューヨーク生活の孤独 (“a haunting loneliness”, *Gatsby*, p. 57), 沈んだ心 (“a sinking in my heart”, *Gatsby*, p. 57) を吐露する。

ニックは冷静にニューヨークの思い出を語る〈回想記の作者〉ではない。夢想家で感傷的、自己陶醉的、成功を約束する街ニューヨークで証券マンとしての人生をスタートさせたばかりで将来が見えないが、野心家でもある。ニックは〈全能の作者〉のごとくにニューヨークでの出来事、ギャツビーの過去を細部に至るまで語るが、その〈語り〉は彼のロマンティックな想像力の影響を逃れることはない。〈事実〉と〈夢想〉、〈具象〉と〈抽象〉の混合する語りは、はたして、作者フィッツジェラルドが意図した、〈一人称語り〉の効果だったのだろうか。

2章 回想されたギャツビー

1. ニックの観察

ニックはギャツビー邸のパーティで、初めてギャツビーと話をした時、彼が「エレガントだがどこかに粗暴さのうかがえる」男で、「その念の入った丁重な物言いは、危ういところで滑稽の域に達することを免れている」(『ギャツビー』, p. 93), と感じる。「オールド・スポーツ」(“old sport”) というギャツビーの呼びかけには「一通りの親密さしかこもっていない。安心させるように相手の肩に手をやるのと同じことだ。」(『ギャツビー』, p. 102) ——“The familiar expression held no more familiarity than the hand which reassuringly brushed my shoulder”, *Gatsby*, p. 54) ——と受け止めている。最初に招待されたパーティのあと、ニックは「二度ばかり、彼のパーティに顔を出し、彼の水上飛行機に乗り、是非にという誘いを受けて専用ビーチをときどき使わせてもらっていた」(『ギャツビー』, p. 119)。ギャ

ツビーと知り合ってひと月の間に、ニックは彼と「5, 6度話をしたと思うが、彼は話題というものをろくすっぽ持たず [中略] 正直なところがっかりしてしまった」(『ギャツビー』, p. 121) と失望する。「この男は正体こそよくわからないが、何かしら重要性をもった人物に違いないという、僕の抱いた第一印象は次第に薄らぎ、今では隣地で豪勢な宴会を催すただの人でしかなくなっていた」(『ギャツビー』, p. 121), と語り、ギャツビーに対する好奇心を失っていた。そして、彼に誘われたドライブの最中に、唐突に切り出されたギャツビーの告白——中西部の裕福な家に生まれ、オックスフォード大学で教育を受けた、家族全員が亡くなり、莫大な財産を相続し、パリ、ヴェニス、ローマでインドの王侯のような生活を送り、宝石を集め、狩猟も楽しんだ——といった身の上話でニックは、「あほらしくて、思わず嘔き出しそうになるのを、必死に抑えなくてはならなかった」(『ギャツビー』, p. 123) ——“With an effort I managed to restrain my incredulous laughter”, *Gatsby*, p. 64——。ニックはギャツビーが身の上話をする時の口調を瞬時に分析し、彼が「早口で教育はオックスフォードで受けた」[下線筆者] と言ったことを聞き逃さなかった。ニックの観察は鋭く、ギャツビーが「言葉を途中で呑み込み、あるいはのどにつかえそうになった」ことに言及する。さらに、「以前にもその台詞を口にするにあたって、困難を覚えて経験があるよううかがえた」と分析し、「そしていったんこのような疑念が生じると、彼の話すことすべてが信頼感を失い、結局のところ、この男にはなにか不正なところがあるのではないかと考えだす」(『ギャツビー』, pp. 122-123), と推論する。ニックは鋭い観察者で、ギャツビーの表情、目の動き(「彼は横目づかいに僕を見た」, 『ギャツビー』, p. 122), 口調、声のトーンから、「君には真実を話そう」(『ギャツビー』, p. 122) と語ったギャツビーの〈真実〉を分析し、疑念を抱く。ところが、ギャツビーがフランスでの戦闘の功績で勲章を授与されたこ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

とを語ると、ニックの疑念は払拭され、魅了に代わる。ギャツビーが「ちっぽけなモンテネグロ」からも勲章を授与された一件をほほ笑みを浮かべて語る様子をニックは、「そのほほ笑みには、モンテネグロという国の苦難に満ちた歴史に対する理解と、モンテネグロ国民の勇猛な戦いぶりに対する思いやりが見て取れた。[中略] その国家の置かれた複雑な立場を、その微笑は隅まで心得ていた」(『ギャツビー』, pp. 124-125) [下線筆者]、と語る。ギャツビーの身の上話に対するニックの「疑念」は「魅了」に変わり、ギャツビーの微笑の意味を好意的に、称讃を込めて読み取る。さらに、ギャツビーがオックスフォードのトリニティ・カレッジの中庭で学友(だとニックは推測している学生たち) 5人と並んだ写真を見せられると、「すべては真実であったのだ」(『ギャツビー』, p. 126) ——“Then it was all true”, *Gatsby*, p. 65——と、一切の疑念を払拭してしまう。そればかりか、「あほらしくて、思わず嘔き出しそうになるのを、必死に抑えなくてはならなかった」、インドの王侯のような暮らしぶりの思い出話さえも、「すべては真実」として受け入れる。モンテネグロの勲章やオックスフォードの写真を見るまでは、話を聞いてもイメージがわからず、「かろうじて思い浮かんだのは、ターバンを頭に巻いた人形劇の登場人物が、裂け目のいたるところからおが屑をこぼしながら、虎を追ってブローニュの森を駆け抜けている情景だけだ」(『ギャツビー』, p. 124)、と語り、ギャツビーを〈ボロを出しながら走る人形〉のイメージに滑稽化していた——“a turbaned ‘character’ leaking sawdust at every pore”, *Gatsby*, p. 64——。ところが、この笑劇風のイメージは一変する——「すべては真実であったのだ。ヴェニスの大運河の畔にある彼の宮殿を鮮やかに彩るいくつもの虎の毛皮を、僕は想像した。癒えることのない心痛をやわらげるべく、ルビーの詰まった宝石箱を開け、その緋色の光の深みを愛でる彼の姿が目には浮かんだ」(『ギャツビー』, p. 126)。

突然、「すべては真実」として、壮麗で、優雅なイメージが喚起されるのはなぜなのか。ニックのギャツビー評価が一変し、ギャツビーの告白が〈事実〉として受け入れられる根拠は何か。モンテネグロの勲章とオックスフォードの写真は、ギャツビーの説明だけで彼の過去を証明する証拠になるのだろうか。あれほど鋭い洞察力と観察眼で、ギャツビーの言動を分析し、疑念を抱いたニックが、勲章と写真を見ただけで、ギャツビーの告白を無批判に信用するのはなぜなのだろう。冷静な観察者を自負しているニック自身が実は気付いていない、判断の甘さがあるということなのだろうか。〈全能の作者〉が語る場合は、〈物語〉の中でニックが観察者の役割を担っていても、彼の判断の誤りや不完全さは読者には明らかにされるはずだ。しかし、「この本」の語り手、著者として、ニックが彼の視点と判断によって人物と出来事について語る構成の『ギャツビー』は、あえてニック本人が自身の判断の誤りに気付いて言及しない限り、読者に〈真相〉は伝わらない。

2. ニックの想像、あるいは創造

ギャツビーが語った過去の出来事を「すべて真実であった」と受け入れたニックが語る〈ギャツビー回想記〉は、ギャツビーにまつわる出来事や彼の告白をニックが彼自身の判断で分析し、想像力と感性で創造しながら、あたかも〈現実の記録〉であるかのように提示する〈ギャツビー像〉である。ギャツビーの〈事実〉はすべて、ニックの分析と想像で状況説明され、読者に見えるのは、〈ニックの観察したギャツビー〉に他ならない。

ギャツビーが初めてデイジーを自宅に招き入れた時の様子をニックは次のように語る。

彼はひとときたりともデイジーから目をそらさなかった。思うにギャ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ツビーはその屋敷の中にあるすべてのものを、それらがどれほどの反応を彼女の愛しい瞳から引き出せるかによって、あらためて評価しておしていたのだ。また折に触れて彼は、自分の所有しているなにかやかを困惑した目でしげしげと見渡した。彼女が自分の目の前に存在するという、そんな信じがたい状況が生じたせいで、まるで何もかもが現実味を失ってしまったみたいに。

(『ギャツビー』, pp. 169—70) [下線筆者]

ニックはギャツビーがデイジーに屋敷を案内していた時の心境を語っているが、〈事実〉の描写は、ギャツビーがデイジーから「目をそらさなかった」ということだけだ。この後に続く状況描写は、「思うに」(“I think”, *Gatsby*, p. 88), 「まるで...みたいに」(“as though”, *Gatsby*, p. 88) と語っているように、ニックの推測でしかない。そして、ニックはギャツビーの語った言葉を再現する時も、その時の彼の心境を推測し、説明を補足する。

「霧さえ出ていなければ、湾の向かいにあなたのうちが見えるんだが」とギャツビーが言った。「お宅の棧橋の先端には、いつも夜通し緑色の明かりがついているね」デイジーはふいに彼の腕に自分の腕をからめた。しかしギャツビーは、自分が口にした言葉に深くとらわれているようだった。その灯火の持っていた壮大な意味合いが、今ではあとかたもなく消滅してしまったことに、自分でもおそらく思い当たったのだろう。デイジーと彼を隔っていた大きな距離に比べれば、その灯火は彼女のすぐ間近に [中略] あるものとして見えた。月に対する星ほどに近いものに思えたのだ。しかし今ではもう棧橋の先端についた、何の変哲もない緑色の灯火に戻っていた。彼が魅了されていた事物が、またひとつ数を減らしたわけだ。

(『ギャツビー』, p. 172) [下線筆者]

ギャツビーはデイジーの敷地に設置された栈橋の端に「夜通し緑色の明かりがついている」とデイジーに語った時、実際には一体、何を考えていたのだろう。ギャツビーが明らかにしなかった——ニックが忠実に再現しなかった——心境をニックは推測し、イメージを飛躍させて、〈全能の作者〉のごとく、描写する。「深く囚われていたようだった」(“he seemed absorbed”, *Gatsby*, p. 90), 「おそらく思い当たったのだろう」(“Possibly it had occurred to him”, *Gatsby*, p. 90), 「あるものとして見えた」(“it had seemed”, *Gatsby*, p. 90), 「思えたのだ」(“It had seemed”, *Gatsby*, p. 90), とニックがギャツビーの心情を語る時、描かれたのは、実はギャツビーの心情ではなく、ニックの憶測に過ぎない。「彼が魅了されていた事物」とはおそらく、「緑色の明かり」を示しているのだろう。しかし、「またひとつ数を減らした」とニックが断言する状況は、ギャツビーの言動からニックが想像した仮定である。ニックが自身の心境を豊かなイメージで詩的に描く場合、読者はニック個人の感性、個性として受け入れ、ニックの心理的状況の〈事実〉として理解できる。しかし、他者の心境をニックが自身の憶測に基づいたイメージで語る場合、それは〈事実〉の描写にはならない。読者はギャツビー本人ではなく、〈ニックが想像/創造するギャツビー〉を見ていることになる。ニックは「この本」を書いている〈全能の作者〉の立場で〈ギャツビー〉の心境を描写する。ところが実際には、ニックはギャツビー同様、『ギャツビー』の登場人物のひとりである。〈全能の作者〉の豊かなイメージが人物の心境を情緒的に描写する場合、読者は〈心的事実〉の詩的表現として受け入れる。しかし、ニックが〈全能の作者〉のごとくにギャツビーの〈心的事実〉を語っても、読者には〈事実〉は見えてこない。

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ギャツビーがどのような口調で、どのような表情で語ったのか。ニックはギャツビーの言葉を再現せず、具体的な描写ではなく、ニックの解釈で状況のイメージを描く。デイジーを案内し終えたギャツビーの様子から、ニックが「彼の顔に困惑の色が戻っていることが見て取れた」（『ギャツビー』, p. 177）としても、その「困惑の色」を、「今ここにある幸福をそのまま真に受けていいものか、かすかな疑念が生じたらしい」（『ギャツビー』, p. 177）、とニックはなぜ、説明できるのだろうか。

デイジーが彼の夢に追いつけないという事態は、その後になって幾度も生じたに違いない。[中略] 結局のところ、彼の幻想の持つ活力があまりにも並はずれたものだったのだ。それはデイジーをすでに凌駕していたし、あらゆるものを凌駕してしまっていた。彼は創造的熱情を持って、その幻想に全身全霊を投じていた。寸暇を惜しんで幻想を補強増大し、手もとに舞い込んでくる派手な羽毛を余すところなく用いて日々装飾に励んできたのである。

（『ギャツビー』, pp. 178-79）[下線筆者]

「デイジーが彼の夢に追いつけないという事態」（“moments [中略] when Daisy tumbled short of his dreams”, *Gatsby*, p. 92）が、具体的にはどのような状況なのかニックは説明しない。ギャツビーの「夢」, 「幻想の持つ活力」（“colossal vitality of his illusion”, *Gatsby*, p. 92）, 「創造的熱情」（“creative passion”, *Gatsby*, p. 92）は、ニックがジョーダンからデイジーとギャツビーの過去のロマンスのいきさつを聞いて推測した、〈ギャツビーの心情〉である。

「彼はデイジーに自分の屋敷を見てもらいたい」と彼女は説明し

た。「あなたの家ならすぐ隣でしょう」

「そういうことか」

「彼はいつかデージーがふらっと、彼のパーティーに顔を見せるんじゃないかって半ば期待していたのでしょね」とジョーダンが続けた。「でもそううまくはいかなかった。それで彼はいろんな人々にさりげなく尋ねまわり始めた。彼女のことを知りませんか。そしてこの私がデージーの知り合いとして最初に浮上してきたわけ。このあいだのパーティーで、使いが来て私が呼ばれたでしょう。あの時のことよ。すべてがどれほど念入りにお膳立てされたか、一部始終をあなたに聞かせたかったわ。もちろん、私はその場ですぐに提案したわよ。じゃあ、ニューヨークでお昼でも一緒にいかがって。すると彼は、こちらがはらはらするくらい、取り乱してしまった。

『私は人の倫に反することをするつもりはない!』って彼は言い続けた。『私はただ、隣のお宅であの人に会いたいです。』

(『ギャツビー』, p. 148)

ジョーダンはギャツビーがニック宅でデージーと再会したいと相談を受け、ギャツビーが語ったことをニックに伝えた——ギャツビーが現在の屋敷を手に入れたのは、「それが湾を隔ててデージーの向かい側にあるから」(『ギャツビー』, pp. 146-47)であり、「ひょっとしてデージーの名前がちらっとでも出てくるんじゃないかと期待して」(『ギャツビー』, p. 149), 「シカゴの新聞を何年にもわたって読み続け」ており(『ギャツビー』, p. 149), 「いつかデージーがふらっと、彼のパーティーに顔を見せるんじゃないかって半ば期待していた」(『ギャツビー』, p. 148)。屋敷にデージーを迎えた時のギャツビーの心理は、ジョーダンから聞いたギャツビーの言葉と様子を根拠にして、ニックが想像した〈ギャツビーの心情〉に他なら

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ない。ニックこそが「創造的熱情をもって」、〈ギャツビーという男の幻想〉
を読者に語る役割を果たすことに「全身全霊を投じていた」のではないか。

3. ギャツビーの告白

「ロング・アイランドのウェスト・エッグ在住のジェイ・ギャツビーは、
彼自身のプラトンの純粹觀念の中から生まれ出た像なのだ」(『ギャツビー』、
p. 181) ——“The truth was that Jay Gatsby of West Egg, Long Island, sprang
from his Platonic conception of himself”, *Gatsby*, p. 95 ——とニックは語る
が、ギャツビーが自身の過去をこのように表現したわけでは、もちろん、
ない。「この本」がニックの語る〈ギャツビー回想記〉である以上、ギャ
ツビーの言説はすべて、語り手ニックの想像力と文学的素養によって記述
されていく。

例えば、ギャツビーが17歳のころの思い出は、ギャツビーの口からはど
のように語られたのだろうか。ギャツビーがニックに語った過去の事実
は——

- ① ギャツビーの両親は貧農。
- ② ギャツビーの本名はジェームズ・ギャッツで、17歳の時に「ジェイ・
ギャツビー」を名乗り始める。
- ③ 家出した後、一年以上の間、スペリオル湖の南岸を移動しながら、は
まぐり掘りをしたり、鮭採りの漁師として暮らす。寝食のために、で
きることは何でもした。
- ④ 若いころに既に、多くの女性と関係を持った。
- ⑤ スペリオル湖を去り、ミネソタ州南部にあるセント・オーラフ大学に
入学。授業料免除の代わりに、用務員の仕事をする。大学の授業内容
に失望し、用務員職にも我慢できず、二週間で退学。
- ⑥ スペリオル湖に戻る。この時、ダン・コーディと出会う。コーディの

船で西インド諸島とバーバリー・コーストに向かう。コーディはギャツビーにその時の状況に応じて、さまざまな役割を任せる（船室係、航海士、船長、秘書、看守）。ギャツビーは5年間、コーディの船で働く。

- ⑦ コーディの死。コーディはギャツビーに25,000ドルの遺産を残したが、女性新聞記者エラ・ケイが横取りする（どのような法的策略が用いられたのかは不明）。

ギャツビーがコーディと出会った時、彼はコーディに「いくつかの質問」をされ、それで彼はギャツビーが「利発で、人並み外れた野心を抱いていることを知った」（『ギャツビー』, p. 184）。それでギャツビーはコーディの船と一緒に航海することになるのだが、コーディが気に入ったのはギャツビーの「人並み外れた野心」（“extravagantly ambitious”, Gatsby, p. 96）だったのだろう。しかし、17歳のギャツビーは当時、一体、何を語り、どのように質問に答えたのだろう。コーディの質問とギャツビーの応答、ギャツビーの態度をギャツビー自身が記憶していて、詳細に記録された日記を読むかのように、ニックに語り聞かせたのだろうか。そして、ニックはその詳細を敢えて、「この本」に写すのではなく——ギャツビーの野心の具体的な設計図を読者に伝えるのではなく——ニックの詩的想像力が創出するイメージで書き直していく。

きわめてグロテスクで幻想的なさまざまな奇想が、ベッドの中の彼を夜半に見舞った。[中略] 言葉にできないほど俗悪なるものの宇宙が、彼の脳裏に際限なく紡ぎ出された。そして、彼は夜ごと、自らの妄想の図柄をさらに豊かなものへと膨らませていった。眠気がやってきて、そこにある鮮烈な情景を忘却の抱擁をもって覆い隠し

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

てくれるまで、倦むことなくそれは続いた。そのような夢想が彼の想像力にあるところまではけ口を提供してくれた。現実というものの非現実性について、それは納得のいく示唆を与えてくれた。世界の礎は間違いなく妖精の翼の上に捉えられているのだと請け合ってくれた。
(『ギャツビー』, p. 182) [下線筆者]

ギャツビーの「奇想」(“The most grotesque and fantastic concepts”, *Gatsby*, p. 95), 「宇宙」(“A universe of ineffable gaudiness”, *Gatsby*, p. 95), 「妄想の図柄」(“the pattern of his fancies”, *Gatsby*, p. 95), 「夢想」(“these reveries”, *Gatsby*, p. 95), 「鮮烈な情景」(“Some vivid scene”, *Gatsby*, p. 95), 「現実というものの非現実性」(“the unreality of reality”, *Gatsby*, p. 95), 「世界の礎は間違いなく妖精の翼の上に捉えられている」(“the rock of the world was founded securely on a fairy’s wing”, *Gatsby*, p. 95) ——はギャツビーが語った言葉ではない。〈グロテスクで幻想的な奇想〉とは、具体的にはどのような想いだったのか。〈言葉に出来ないほど俗悪な宇宙〉も明確なイメージを印象付けることはない。〈世界の礎が妖精の翼の上に築かれている〉という現実認識は、17歳のギャツビーが自身の将来に抱く不安定感、確信のなさを想起させるが、明確な説明を避けて曖昧で抽象的なヴィジョンだけで心理を描写することで、読者に解釈を委ねる語り口である。ニックはギャツビーの身の上話を聞いて17歳のギャツビーの心的葛藤を想像し、結局、読者が鮮明で具体的なイメージを構築できるような語り方をしない。

ギャツビーはプラザホテルの一件のあとでニックにデージーとの過去のロマンスについて告白した時——「そのようなわけで、私は野心なんぞ放つたらかしくにして、日ごとに深く恋に落ちていった。そしてあるとき、もうかまうものかと腹を決めた。偉業を達成することにどんな意味があるだろ

う。自分がこれから目論んでいることを、彼女に語っているほうがはるかに楽しいというのに」(『ギャツビー』 p. 271) [下線筆者] と語った。原文では——“Well, there I was, ‘way off my ambitions, getting deeper in love every minute, and all of a sudden I didn’t care. What was the use of doing great things if I could have a better time telling her what I was going to do?” (Gatsby, p. 143) [下線筆者]。ギャツビーは「野心」を抱いていたことには言及するが、具体的には語らないし、「偉業を達成する」や、「自分がこれから目論んでいること」が何をすることなのかも明らかにしない。まだ成功を手に入れていなかった頃のギャツビーは、壮大な野心を膨らませ、実現するための様々な方策を探っていたことは伝わってくる。しかし、「言葉にできないほど俗悪なるものの宇宙」とニックはギャツビーの〈妄想〉を説明したが、ギャツビーが語った「野心」や「偉業」を連想させるには、言葉のイメージが複雑で難解だ。ギャツビー本人には、自身の心情を詩的イメージで説明するだけの文学的素養はなく、極めて単純で、往々にして非常に稚拙な、詩的重層性を全く持たない語り口が彼の言語表現の特徴である。結局のところ、引用符で囲まれたギャツビーの言葉を除いて、すべての〈ギャツビーの心理描写〉は語り手ニックの詩的連想が紡ぎ出した〈ギャツビーの心象風景〉である。ギャツビーの「妄想の図柄」は、実は、〈ギャツビー物語〉を構築するニック自身がギャツビーに抱いた〈妄想の図柄〉に他ならない。

ギャツビーがデージーとの5年前のロマンスを語った時、その時の光景を「家々のひそやかな明かりが、かすかな唸りをたてて暗闇にこぼれ」(『ギャツビー』, p. 202) ていたと描写したのは、ギャツビーではなく、語り手ニックである。「何ブロックもまっすぐに続く歩道が紛れもなく一本の梯子となって、樹木の頭上にある秘密の場所に届いていることを見て取った」(『ギャツビー』, p. 203) のは、ギャツビーではなく、ギャツビー

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

の告白を聞いてニックが思い描いた〈ギャツビーの心象風景〉だろう。ニックはギャツビーの話を「あまりの感傷に辟易しながら (“appalling sentimentality”, *Gatsby*, p. 107) 聞いていた、と語るが、ギャツビーが語ったという思い出話は、ニックの想像力でインスピレーションを与えられ、ニックの修辞で飾られた感傷的描写である。ギャツビーは実際、デイジーとのロマンスを感傷に浸って語ったのかもしれない。しかし、これまでもそうであったように、〈ギャツビーの物語〉を「辟易するほど感傷的」な文体で語るのは、ギャツビー自身ではなく、語り手ニックの〈語り〉の特徴である。デイジーがトム・ブキャナンと結婚して去った町にギャツビーが訪れた時――

太陽は低く身を落とし、今は消えなんとする都市に――デイジーがかつてその空気を胸に吸っていた都市に――祝福を与えるべく、自らの身を広く延べているかのように見えた。ギャツビーはその空気のせめて一筋をもぎ取ろうと、デイジーが彩ってくれたその場所のかけらをひとつでも取り置こうと、切なく片手を前に差し出した。しかし、彼のにじんだ目の前を、すべてはあまりにも素早く過ぎ去っていった。 (『ギャツビー』, pp. 275-76) [下線筆者]

ギャツビーがデイジーの去った町を訪れた時、「片手を前に差し出した」とニックに語ったのだろうか。たとえ語ったとしても、その行動の動機と心理的状况をギャツビーは「その空気のせめて一筋をもぎ取ろう」として、「その場所のかけらをひとつでも取り置こう」として「切なく」手を前に出した、とニックに説明したのであるか。

ギャツビー、デイジー、トム、ジョーダン、ニックの5人がプラザホテルに繰り出し、トムがギャツビーのビジネスの実体が酒の密造や違法賭博

に関係していることを暴露し、トムの友人のウォルターが「この僕にもしゃべれないような恐ろしい何かが、お前の身边にはある」(『ギャツビー』, p. 244), とギャツビーに声を荒げた時、ニックはデイジーが「怯えた目でギャツビーと夫とを見比べ」、ギャツビーが「まともな言葉では描写できそうにない形相」(『ギャツビー』, p. 245)を顔に浮かべているのを見る。彼はまさに「人を殺したことのある」男のように見えた、とニックは語る。プラザホテルでの対立、応酬はニックの冗長なコメントは極力省かれて、対話のすべてが忠実に再現される形式で記述され、緊張した関係が読者の意識に鮮明に映像化される。ところが、この危機的場面を切り抜けようと試みるギャツビーの心の内をニックが忠実に再現できるはずもなく——ニックは〈全能の作者〉ではないのだから、他者の心理は当人が吐露しない限り、すべて〈語り手〉ニックの憶測になる。

どれだけ言葉を尽くしたところで、彼女はますます自分の内側に退いていった。ギャツビーもそれを見て弁明をあきらめ、午後が刻々と過ぎ去っていくあいだ、命脈を絶たれた夢のみが空しく戦いを続けた。それはすでに触れることのかなわなくなったものに手をのばし、部屋のあちら側にある失われた声に対して痛切に、しかしあきらめることをよしとせずすがつた。(『ギャツビー』, p. 245) [下線筆者]

「命脈を絶たれた夢」(“the dead dream”, *Gatsby*, p. 128)が戦い続ける——事実として、ギャツビーはどのような態度をとっていたのだろう。トムがギャツビーの〈正体〉を暴露し、ギャツビーが自己弁明のために口にした「ウォルターの一件」でさらに悪化したギャツビーの立場。ますますデイジーがおびえて言葉もでない。ギャツビーは弁明をあきらめる。そして、この後のギャツビーの心境はニックの推測になる。ギャツビーはデイ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ジーをあきらめきれず、何とか彼女の心を開かせたいと葛藤し、デイジーにすぎるような視線を送っていた——ようにニックには見えた、ということなのだろう。

結 論

ニックは〈ギャツビー回想記〉の最終ページで次のように記している——

そこに座って、知られざる旧き世界について思いを馳せながら、デイジーの棧橋の先端に緑の灯火を見つけた時のギャツビーの驚きを、僕は想像した。 (『ギャツビー』, p. 325) [下線筆者]

結局のところ、ギャツビーについて語るニックの〈語り〉はすべて、「僕は想像した」というただし書きが必要だろう。ニックが語る〈ギャツビー回想記〉で知らされる〈ギャツビー〉の人物像は、ニックがギャツビーやウルフシャイムから聞いたエピソードや、トムが依頼した身辺調査によって断片的に情報が集められていくが、〈ギャツビー〉の正体の全貌を明確に描くものではない。ギャツビーがニックに告白した過去——「若きインドの王侯顔負けの生活を送った」——はギャツビーの作り話のように聞こえるが、あるいはニックが思い直したように、〈事実〉なのかもしれない。ギャツビーがニックに見せた「モンテネグロの勲章」と、のちにウルフシャイムからニックが聞いた話——「戦争でもらった勲章をぎっしりと付けていました」(『ギャツビー』, p. 307)——をつなげれば、ギャツビーが戦争で功績をあげたことは事実なのだろう。そして、退役したばかりで「すっからかんで、私服を買うことができなかった」ギャツビーを「使い道がありそうだとぴんときた」ウルフシャイムが、彼を「在郷軍人会に登録させ、

そこで有力な地位につかせ」(『ギャツビー』, p. 307), オルバニーにいる取引先のために、「ちょいとした働き」(『ギャツビー』, pp. 307—8)をさせたということも〈事実〉なのだろう。しかし、「ちょいとした働き」(“he did some work for a client of mine”, *Gatsby*, p. 162) [下線筆者]とは具体的にはどのような仕事だったのだろうか。ウルフシャイムは1919年のワールド・シリーズで、八百長を仕組んだギャンブラーである。その彼が刑務所に入れられなかったことをギャツビーが、「尻尾がつかめなかったのさ、オールド・スポーツ。頭の切れる男だからね」(『ギャツビー』, p. 138), と評価する時、ギャツビーの生き方やビジネスのモラルが垣間見える。「以前、警察長官のために便宜を図る機会があつてね、それ以来、毎年クリスマス・カードを送ってくれる」(『ギャツビー』, p. 128)——警察長官がギャツビーに恩義を感じるほどの「便宜」(“I was able to do the commissioner a favour once”, *Gatsby*, p. 67) [下線筆者]とは何なのか。「毎年クリスマス・カードを送って」くるのは警察長官の個人的謝意の表れであり、ギャツビーの「便宜」が公然と謝意を表すことの出来ない案件にちがいない。トムの依頼した身辺調査では、ギャツビーがウルフシャイムと共に「ニューヨークとシカゴで、ぱっとしないドラッグ・ストアを片端から買い上げて、大っぴらにエチル・アルコールを売っている」(『ギャツビー』, p. 243), 「賭博法違反でお前を突き出すこともできたんだ」(『ギャツビー』, p. 244), 「ドラッグ・ストアの商売なんて、所詮小銭稼ぎにすぎない」(『ギャツビー』, p. 244), 「ウォルターがこの僕にもしゃべれないような恐ろしい何かが、お前の身辺にはある」(『ギャツビー』, p. 244)——ことが〈暴露〉されて、ギャツビーが酒の密造に関わり、賭博で違法行為を働いたことは〈事実〉なのだろう。ギャツビーの死後にかかってきたスレイグルという男からの電話——「パークのやつがまずいことになった。[中略] 債券をさばっている現場を押さえられたんだ。そのたった五分前

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

に、ニューヨークから回状がまわってきててな、ブツの番号が割れていたんだよ。まいっちゃまったぜ。ちんけな田舎町だっていうのに」(『ギャツビー』, p. 299) ——は、ギャツビーのビジネスの暗部を明白に語っている数少ない場面の一つである。ギャツビーは生前、ニックの面前で電話に應對し、「小さい町での取引」に限定するように指示を出していたが(『ギャツビー』, pp. 173-74), ニックの記憶の中にあつたこの不可解な電話は、ギャツビーの死後、ニックが偶然に受話器を取って、直接聞くことになるギャツビーの仕事に関連した電話の内容と結び付けられると、トムが示唆したくギャツビーの仕事の闇が、中傷やうわさではなく、く事実であることが証明されていく。

ギャツビーのくビジネスの実体はトムやウルフシャイム、スレイグルといった仕事仲間の話からく事実の断片が見えてくる。しかし、ギャツビーのく心情はニックの憶測でしかない。

デイジーの棧橋の先端に灯火をみつけたときのギャツビーの驚きを、僕は想像した。彼は長い道のりをたどって、この青々とした芝生によるやくたどりついたのだ。夢はすぐ手の届くところまで近づいているように見えたし、それをつかみ損ねるかもしれないなんて、思いもよらなかったはずだ。その夢がもう彼の背後に、あの都市の枠外に広がる茫漠たる人知れぬ場所に——共和国の平野が夜の帷の下でどこまでも黒々と連なり行くあたりへと——移ろい去ってしまったことが、ギャツビーにはわからなかったのだ。

(『ギャツビー』, p. 325) [下線筆者]

ギャツビーの死後、ニックはニューヨークを離れて帰郷する前にギャツビー邸を訪れ、邸の前に広がる海岸の砂の上におおむけに寝転んで、くギャツ

ビーの夢〉に思いを馳せる。一体、〈ギャツビーの夢〉とは何だったのだろうか。ギャツビーは確かにニックの前で、「夢」や「野心」という言葉を口にしていて。しかし、ギャツビーが自身の夢や野心について、具体的にニックに語ったかどうかはわからない——少なくともニックはギャツビーの野心や夢を具体的に、忠実に、彼の言葉を引用して〈ギャツビー回想記〉の中で語ることはなかった。「思いもよらなかったはずだ」、「ギャツビーにはわからなかったのだ」と断言したのはギャツビーではなく、ニックである。「夢はすぐ手の届くところまで近づいているように見えた」という心境も、ニックの推測だろう。ニックが語る〈ギャツビー回想記〉の読者は、ニックの言葉で説明され、描写される〈ギャツビーの心情〉をたどるだけである。

『グレート・ギャツビー』で取り入れられた〈一人称の語り手〉の設定がめざした効果は何だったのだろうか。事実を客観的に語ることのできる〈全能の作者〉の語りではなく、作品中の人物を語り手にすることで、事実の背景や人物の心理の客観的分析よりも、〈語り手〉のロマンティックな思い込みを利用して、より自由にイメージを飛躍させ、過剰とも見える、しかも、かなり偏向した想像力で人物と出来事を描くための手法だったのだろうか。〈語り手〉の憶測による状況と心理の描写は、読者の想像力を刺激する文体こそ〈芸術的〉と考えた作者の技巧だったのか。

ニックには〈語り手〉として欠陥があるのではないか。ニック自身は優れた洞察力と判断力を自負しているが、ギャツビーの「インドの王侯のような生活」に関する判断が一転したエピソードでも明らかのように、ニックは〈嘘と真相〉を明確に区別して語ることのできる〈全能の作者〉のような語り手ではない。作者フィッツジェラルドの技巧的ミスでないのであれば、ニックという〈信頼できない語り手〉の設定は『ギャツビー』の

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

〈語り〉の構造の前提なのか。そうだとすれば、語り手ニックは〈全能の作者〉ではないので事実の真相を明確に説明、描写する必要はない。語り手が自身の思い込みと想像力で判断しながら、その憶測を〈真相〉であるかのように思いこんで語り、人物や状況の描写が読者に明確で具体的なイメージを与えるものでなくても、それは作者フィッツジェラルドが技術的な欠陥としての責任を負うことにならない、という作者の目論見だったのか。ギャツビーの心情を描く時、語り手ニックは多様なイメージを混在させ、飛翔させて、読者の想像力を刺激するが、具体的な実体を捉えさせることはない。イェール大学で文章を書いていた、というニックの自負が、一流の詩人、作家気取りでイメージに依存した人物評を書かせた、という〈語り〉の設定なのだろうか。

〈ギャツビー回想記〉の最終ページ――

ギャツビーは緑の灯火を信じていた。年を追うごとに我々の前からど
んどん遠のいていく、陶酔に満ちた未来を。それはあの時我々の手か
らすり抜けていった。でもまだ大丈夫。明日はもっと早く走ろう。両
腕をもっと先まで差し出そう。・・・・・・そうすればある晴れた朝に

だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボー
トのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも。

(『ギャツビー』, pp. 325-26) [下線筆者]

ギャツビーが信じていた「陶酔に満ちた未来」(“the orgasmic future”, *Gatsby*, p. 171) とは、ギャツビーが実際には語らなかつたかもしれないが、ニックが推測した〈ギャツビーの夢〉だろう。そして、ニック自身が実は

ギャツビーについて語る時に吐露していた〈ニックの夢〉でもある。「この橋をいったん超えてしまえば、どんなことも可能になるのだ [中略] 思いもよらぬことさえ…… そう、このギャツビーですらそれほど突飛ともいえない存在になってしまう」(『ギャツビー』, p. 129) ——“‘Anything can happen now that we’ve slid over this bridge,’ I thought; anything at all...’ Even Gatsby could happen, without any particular wonder.” (Gatsby, p. 67) [下線筆者]。〈ギャツビーという在り方〉がニューヨークではあり得る、と思えた頃のニックはニューヨーク生活になじんできて、証券マンとしての成功を目指して勉強していた。しかし、ギャツビーがトム・ブキャナンの嫉妬による悪意で破滅していく時、〈ギャツビーという在り方〉は結局、つぶされていく、とニックは実感したのだろうか。ニックが語る「我々」とは、ニックを含むすべての〈夢追い人〉だろう。もちろん、ギャツビーがそうであったようにニックもまた、他の人々同様に「陶酔に満ちた未来」を夢見て、幾度もチャンスを掴みかけ——あるいは、掴みかけたように感じただけかもしれないが——、しかし、掴むことができず、それでも諦める事をせず、必ず成功を手にする事を信じてさらに努力を続けていく。〈ギャツビー的在り方〉の可能性を信じていた頃のニックは〈夢の実現〉の可能性を信じていたのだろうか。しかし、ギャツビーの死の顛末によって〈ギャツビー的在り方〉と〈夢の実現〉は幻想でしかなくなったのではないか。そして、ギャツビーの存在自体が実体を失い、〈虚構の人物〉になってしまったのではないか。

ニックがニューヨークに抱いた幻想とギャツビーに抱いた妄想は表裏一体となって、ニックの〈ギャツビー像〉を完成させていった。「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」、とニックはギャツビーを評したが、〈ギャツビー回想記〉の形式で語りながら、実は、ニックこそ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

が〈ギャツビーなる人物〉を創造していたのではないか。ニックはギャツビーとの出会いを通して、想像と憶測の中でギャツビーの人生を追体験し、再現を試みた。ただし、〈語り手〉の憶測と想像力で書きあげる〈回想記〉という構成は、〈ギャツビー像〉の忠実な再現にはならない。読者は最後まで、ギャツビーの実像と彼の心的状況の真実を知ることができない。結局のところ、『グレート・ギャツビー』の主人公は語り手のニックであり、読者が〈知る〉のはニックのニューヨーク生活の現実であり、彼が観察し、分析し、描写する、〈ギャツビー像〉である。作者のフィッツジェラルドが〈一人称の語り手〉を利用して意図した効果が、〈信頼できない語り手〉による夢想的物語の構築だったのだろうか。フィッツジェラルドは『グレート・ギャツビー』執筆中に『スクリブナーズ』の編集者に宛てた手紙の中で、「光り輝く世界のような想像力を維持しながら」、「芸術性を意識した作品」を構想している、と書いていた。フィッツジェラルドは「光輝くような想像力」を語り手ニックに与え、〈ギャツビー回想記〉を「芸術性を意識した作品」に仕上げさせた、ということなのだろうか。

フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』は、実は、〈ギャツビー〉の物語ではなく、ニック・キャラウェイが〈ギャツビー物語〉を創造する、『ニック・キャラウェイ物語』として読むべき作品なのかもしれない。

参考文献

Fitzgerald, F Scott, *The Great Gatsby*. London: Penguin Books, 1960.

スコット・フィッツジェラルド、『グレート・ギャツビー』村上春樹 訳、中央公論新社、2011年

アレン、フレデリック・ルイス、『オンリー・イエスタデイ』藤井ミネ訳、筑摩文庫、2000年

ターンブル、アンドルー、『完訳フィッツジェラルド伝』永岡定夫、坪井清彦

- 訳, こびあん書房, 1992年
- 野間正二, 『グレート・ギャツビー』の読み方, 創元社, 2008年
- 武藤脩二, 『1920年代アメリカ文学』, 研究社, 1993年
- 村上春樹, 『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』, ティービーエス・ブリタニカ, 1988年
- Beuka, Robert. *American Icon: Fitzgerald's The Great Gatsby in Critical and Cultural Context*. New York: Camden House, 2011.
- Bloom, Harold, ed. *F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*, New York: Chelsea House Publishers, 1986.
- Brucoli, Matthew, J. *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters*. New York; Charles Scribner's Sons, 1994.
- Cartwright, Kent. "Nick Carraway as an Unreliable Narrator." *Papers on Language and Literature* 20, no 2 (Spring 1984)

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

SYNOPSIS

“So he invented just the sort of Jay Gatsby”

—*The Great Gatsby* and its Narrative Technique—

ONO Yoshiko

This paper is an attempt to re-examine the narrative technique adopted in *The Great Gatsby*. The first chapter deals with the structure and the authority of the first-person narrative. The second chapter analyzes how Gatsby, introduced as the main character of the book, is portrayed from the narrator's point of view. The narrator assumes the role of the omniscient “I” and endeavors to recollect the smallest details of his encounter with Gatsby; however, the ‘authorized’ story-telling reveals the psychological depth of the narrator himself and his emotionally biased judgements about Gatsby. The first-person narrative fails to present the clear portrayal of Gatsby, only to create the character in the way the narrator wants to see.